

---

# 肝試し

朋次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

肝試し

### 【Zコード】

N48780

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

病院の怪談メインの話

僕の2階の部屋からは病院がよく見える。

だがあそこは今年の春につぶれたらしい。六階建ての建物はまだまだ新しく見えるのに。

僕の弟の巳太はひどいぜんそく持ちだからあそこには世話をなつた。発作がひどくなつて入院していたことも何度がある。

あの病院がつぶれてからは仕方なく隣町まで診察してもらいに行くようになった。ママはあそこが一番近くて良い先生がいたのに、まだに残念がる。なんでも赤字で潰れて以来、次の持ち主がなかなか決まらないそうだ。

夜になつて電気もつかない病院はとても不気味だ。梅雨時にはもう幽霊が出るらしいということわざがでた。僕は信じていなければ

も。

僕は辰雄。11歳。小学校の5年生。いいたくないがクラスの中で一番背が低いのでチビと言われる。喧嘩をしても負けてしまう。いびりの中心人物は健二だ。あいつはクラスで一番背が高い。背の低い僕が目障りらしいのだ。僕は勉強こそ苦手だが、体育は得意だ。かけっこやサッカーではクラス一番だ。飛び箱もドッジボールも誰にもまけない。健二はそれが許せないらしい。ちびは小さくなつてろ、とかいう。言葉の暴力は許せない。あいつは空手をやつているというが僕は負けない。

1学期の終業式の日、とうとう健二と大喧嘩になつた。身体が小さい分あいつより小回りがきくから隙を見て噛みついたりした。すると健二は蹴りを入れてきた。空手の蹴りだった。ぼくは空手を知らないのに卑怯ではないか?その一発でぼくの左腕全体にじいんとしびれがきた。もつとも2日もたてばなおったけど。僕は喧嘩にまけてとても悔しかったのでこの夏から空手を習い始め

ることになった。道場は家の近くになくな駅2つ分向いのくんぴな  
場所にあった。

すると、あいつ、健一もそこ道場性だつたんだ。畜生め！

健一は黒帯だった。強いはずだ。僕がどんなにがんばってもケン力で歯が立たなかつたはずだ。

あいつは道場で稽古している間は、何もいわなかつた。空手の先生は等々力先生と言つて、2メートル近い大男でとても強そうだ。格好いいんだぞ。

初めての空手の稽古はきつかったが、汗をかくのは楽しかつた。1回やつて僕は続けられそうだと思った。週2回の割合で通うことになった。稽古の時は白い空手着に白い帯をぎゅっと巻く。技の区切りごとに僕たち生徒は「押忍！」と言つて、手を交差させる空手独特のあいさつをする。大きな声で「押忍！」といつゝことに強くなつていきそつな気分だ。

等々力先生が入門したての僕をみんなの紹介してくれた時、黒幕や緑幕の連中にまじつて当然健一もいた。先生はお互いが強くなるように助けあうんだぞ、みんなで強くなり、みんなが仲間だぞ、といつことを忘れるなど、言つた。

が、健一は聞いていなかつたようだ。

更衣室で健一と一人だけになつたとき、あいつはすすすと近寄つてきた。

「ちびは」の1回だけでやめるんだな、どうせこしたつて俺にはかなうわけないぞ」

といいやがる。僕は健一を突こうとしたが、うまくかわされてしまつた。それで髪をひつつかんでやつた。健一は僕をはがそうとしたが僕は決して離れなかつた。なに、空手は初心者でもしがみついて離れないのはできる。健一は僕をなんとかして振りほどいた。そこへ等々力先生がやってきて、ぼくらを引き離した。

二人とも先生の部屋へ呼ばれてすごく怒られた。健一は無傷で髪がほんの30本ほど抜けただけだが、僕はおりかけていた左

腕がまたしびれてきた。ちくしょ「うめーーー！」

でも先生の手前、仲直りの握手をした。

一応、

礼儀上だ。

僕は復讐をちかったね。健二も田をあわせない。ちびがどうしてそんなに悪いのだ。おまえは性格異常者だろ。いつかきっとこの健二に勝つてやる。

ぼくは家に帰つても、覚えたての空手の型を使つたトレーニングをした。しひれる左腕をかばいながら、した。

だけどママが怒るんだ。勉強しなさいって。つて親つてどうしてこう、子供のことをわかってくれないのだろうか。大体ママがちびだから、ぼくもこんなにチビにつまれてきてしまったのだ。それを思うとママのことがちょっと嫌いになる。

弟の巳太なんかパパ似だから、ぼくよりも背が高い。知らない人が見ると巳太の方がお兄さんと思うはずだ。年が1歳しか違わないのに、背が高いだけで態度がでかくなつたような気がする。本当はぜんそく持ちで、ひゅーひゅーと咳をするくせに。

身体が弱いから巳 は家で本ばかり読んでいる。お化けや幽霊の本が多いかな。勉強も好きらしい。だから成績も良い。当然ママのお気に入りだ。バカだよ、あいつ。ひょろひょろで頼りない感じ。

背を丸めて本を読む姿を見ているだけで腹が立つこともある。だから、僕は巳太が気に入らないときは、背中をめがけて蹴つてやることもある。

空手ってな、おもしろいんだ。稽古すればするほど強くなるんだ。やつてみればわかるよ。ちびでも蹴りが決まればでかいやつでも、棒きれのように倒れる。

あつ、まだはじめたばかりなのでそこまではできないけれどな。黒帯の人たちを見てくれれば見あきないぞ。みんな強いぞ。早くああなりたいなあつて思うぞ。

稽古は厳しいので終わると汗びっしょりだ。そしてすつきりした気分になる。

何度も言つがぼくはちびなのでかけっこ早いが勉強はだめだしクラスで軽くみられていたように思つ。でもこの頃自身がついてきた。誰かが背丈のことだからからかつても、頬を一発バシン！で決まりさ！最もその日の夕方、親が呼ばれて謝りに行く羽田になるだらうけれどもな。

そうしているうちに昇級審査の日が決まった。1ヵ月後の日曜日に午前中が昇級審査で午後が有段者たちの練習試合があるといつ。ぼくはまだはじめたばかりで受験はできないがきっとこれからに役立つだらうから見学において、といわれてわくわくした。

空手の級数は帯の色でわかるようになつていて。もしぼくが審査に出てうかれれば白帯から黄帯になれるそうだ。早くそうなれたらいいなあ。

その次は緑帯、そして茶帯、最後に黒帯。聞くといひによると健一のバカは4歳のころから空手をしているそつだ。

ぼくが一生懸命見よう見まねで稽古の型をしていると横田でくすつと笑つたり、僕の方をまっすぐ見据えて突きの稽古をしたりする。あれは絶対にわざとだ。腹が立つが僕はまだ弱い。今に見ておれよ、と無視して一人で鏡の前へでて黙々と稽古する。

等々力先生はぼくと健一の仲が悪いのを心配して、道場同士の試合があるときは仲間になるのだから、ケンカしないように、と注意した。黒帯の方が白帯の初心者、つまりぼくを気遣つてあげないといけないと健一をさとしてもくれた。健一は先生や先輩たちの前では神妙にしていたが基本的に知らん顔だ。この道場で小さいときから稽古しているから大人の生徒とも全員知り合いだ。健一、健一、とかわいがられている。ぼくは絶対に負けてはたまるもんかっと思つたね。

さて幽靈がでるという病院の話に戻ろう。

さつきも言つたように夏休みの昇級審査だ。ぼくははじめたばかりの白帯だが次は黄帯をめざす。うんとがんばれば受けさせてもらえるかも・・・。

それで自主稽古をはじめた。せまい庭でやるとママは勉強しようと怒る。仕方なく例の病院の駐車場で稽古することにした。あそこは広いんだ。病院の敷地は家のすぐそばだし。駐車場は門が閉められてはいるが、なにあんなもの、ないと一緒だよ。鉄条網なんか誰かがさきにまんなかを大きく広げてくれていた。ぼくはちびだかららくらくとぐぐれた。ちびにだつていいこともあるさ。

自主稽古はおもに夜だ。あんまり遅くなつてもママが怒る。学校が終わるといつたん家にかかる。荷物を置いておいて汚れてもいい服に着替えてさあ出勤だ。大体5時くらいから夕食までかな。ぼくは駐車場のどまんなかに行く。道場よりも広々としていてどんなに暴れようが大丈夫だ。くつをぬいではだしになると、日中にやけたアスファルトが心地よい。柔軟体操からはじめて突き、蹴りの稽古をする。型の稽古も難しいし、ぼくは覚えが悪いのですぐに忘れてしまう。まだ痛む左腕をかばいながら懸命に稽古したよ。

稽古は日が沈んでも、月明かりと街灯の光で十分だつた。ここに駐車場には週末になるとスケボー好きの連中も遊びに来ていた。彼らはぼくよりも年上だつたが近所に住んでいて小さいころからの顔見知りだつたしすぐに仲良くなつた。

一番仲良くなつたスケボー仲間は1学年上の6年生の小島、そして中1の武石、笹見だつた。3人とも空手にはあこがれているんだつて。ぼくは型を教えてやつた。連中もスケボーの乗り方を教えてくれた。

駐車場のすぐ後ろに当然例の病院が黒くそびえたつていて。が別に何もおこらなかつた。第一怖くともなんともなかつたのだ。だって巳太の小児科の診察の順番取りにいかされたりしていたし、家はすぐそこだし。おじいちゃんもこここの病院でずっと前に死んだのだ。どうしてあそこで幽靈ができるのだ？ばかばかしい。

幽靈がいる！と真顔でいうヤツは同じクラスにもいたが信じているのは病院から遠いところにすんでいるヤツばかりだ。同じ町内にいるヤツはぼくも含めて信じていない。スケボー仲間もそうだ。

昇級審査もあと3日ばかりに控えたころだたかな。たまたま、その日に稽古していたのはぼく一人だった。スケボー達は来なかつた。そろそろ帰ろうかと思つていると背後の病院からぱつと明かりがついた。明々とついた。ぼくの影が駐車場の表まで、すす一つとのびた。でも、すぐに暗くなつた。ほんの一瞬だつたから氣のせいだと思つた。でも何となく氣味が悪くなつて後ろも見ずに帰つた。

次の日にスケボー達がきたのでこのことをいつと、何のこととはなかつた。

「今度、町内の子供会の肝試しはこの病院に決まつたそうだ」  
ぼくはなんだ、と思った。教えてくれたのは小島だつた。お父さんが町内会の会長だからわかつたのだろう。きのうの明かりのことをいつと、ぼくは知らなかつたけど、多分下見に行つてたのだろうという。毎年小学生の低学年は、盆踊りの後、近くのお寺で肝試しがあるが、今年は病院になつたのだろう。でも怖くないや。こんなところ・・・。

いよいよ審査を明日に控えた。どのみち受けられないとはわかっていても、いろんな人が稽古をみにきて有段者の試合も見れる。楽しみだ。

だからいつもより自主稽古を丁寧にした。あつといつ間に夜の8時になった。いくら夏休みでも遅くなるとママが怒る。だから帰ろうとした。するといつしょにいたスケボー達が「誰かが来た」という。

確かに駐車場に誰かが入るうとしていた。大人が3人と子供が1人だった。

どこかで見たことのある奴らだな、と思ったらそれは、ぼくが通っている道場の連中だったのだ。街灯が明るかったので誰かはすぐにわかつた。うち、1人は四季さんというやさしくて強い黒帯だった。後の人顔は知っていたが、名前までは知らない人だった。子供はなんと、健二だった。

ぼくは4人の前に立って、押忍!といつてあいさつした。4人は驚いたようだ。

「ぼくです。田中辰夫です」

そういうと四季さんは「やあ」といつて笑った。

健二はぼくのあいさつに答えず嫌な顔をした。嫌なヤツはお前じや、このばかと思ったが何もいわないとした。

ぼくは大学生のお兄さんに「稽古ですか?」と聞いた。すると「肝試しにきた」という。ぼくは言った。

「幽霊のうわさなんかうそですよ、ぼくは毎晩ここで稽古しているけれど幽霊に会ったことないよ」

四季さんや大学生のお兄さんたちは顔を見合させて「ふむ」といった。すると健二が

「中にも入ったこともないくせにうそをつくくな!」と叫んだ。

ぼくはもぢりん言い返す。

「この中にはなあ、100回は入つているぞ」

「それは病院が病院だつたこりの話だろ、ぼくだつて100回は入つてゐるわ」

「まあまあ」

四季さんたちがぼくたちの間に立つた。ぼくたちの仲が悪いのを良く知つてゐるようだ。健一は大人たちに聞こえないようにしてクチパクで「このちび！」とさやいた。ぼくはかつときて殴ろうとしたがお兄さんたちがぼくをおさえた。

「けんかはいかん、いかん」

ぼくは悔しかつた。ちびは確かにちびだけれど、どうしてからかいの的になるのだろうか。負けるものかと思つた。健一はきっと大きくなつても弱い者いじめをするようになるだつて、お前なんかに絶対にまけるものか！

お兄さんたちは病院の暗い窓を見上げていた。

「確かに夜の人気のない病院は不気味だな、辰夫くんは勇氣があるねえ」

ぼくは照れた。ほめられることにはなれていなんだ。

「家が近いし、家族みんなでお世話になつてたし、全然へいき、怖くない。駐車場は広いし」とむにやむにやと返事した。

四季さんだけが懐中電灯をもつてきていた。

「じゃあ、たいしたことないだらうけれどせつかくこじまで来たのだし、行くだけは行つてみるか」

スケボー達はおずおずと「ぼくらも行つてもいいですか」と聞いた。お兄さんたちはいよいよ、うなづいた。それで何となくぼくも含めて全員で行くことになった。

きつと遅くなつてママに怒られるだらうけれど、おもしろそうだよな。健一がいるのはおもしろくなかったが、場合によるとおもし

ろくなるかもしないだろ？な？

そうだろ？

カンの良い小島は健一がぼくの左腕をけがさせたヤツと察したようだ。スケボー三人組は健一の背後で、くいっとあごをしゃくつてぼくに目配せした。

はつはー！

決まりさ！

暗黙の了解つてわけさ。

ぼくは、ほくそえみながら黒帯のお兄さんたちに「案内するよ」と申し出た。

メンバーは空手の四季さんはじめ先輩たちと健一で4人、ぼくとスケボー達で4人。

合計8人か。

懐中電灯は1個で十分だつた。その方が雰囲気が出る。肝試しとしては時間も少々早いがいいじゃないか。おじいちゃんが入院していた時によく見舞いに行つていたから病院の中も良く知つている。スケボー達も町内の人間だから良く知つている。知らないのは空手の連中だ。彼らはこの町の人間ではなかつた。

病院の正面玄関はすぐ目の前だがもちろん閉まつていた。透明の大きなガラスがあつたはずの場所にはベニヤ板がしつかりとかぶされ「閉院になりました」と書かれたビラが貼つてある。しかし横のガラスまでは板はかぶされてはいない。一番大柄の先輩がそこから開けようとしたが開かない。

「ガラスを割つてしまおうか」

という意見が出てきた。でも見つかれば問題になる。裏口までまわつてみた。すると一つだけ開いていたのがわかり、そこから入ることにした。少し高い位置から入ることになるが大丈夫。でも、最初に電灯を持つて入つた四季さんが

「ここ、誰かが出入りしているのじゃないかな」

と言い出した。電灯を近づけてみるとそこガラスのレールだけほこりがないという。

僕は返事をした。

「そういうば昨日電気がついていました。すぐに消えたけどスケボーをもつたままの小島も答える。

「お父さんが今年のお祭りのあと肝試しひこの病院にしようか、と言つっていました。誰かが下見にきたのかもしません」

四季さんたちはうなづいた。月明かりで病院に電気はついていな

くとも十分に見通せた。しかし階段とエレベーターのあたりは真っ暗だ。健二はいつもの勢いもなく無言だった。ぼくはほくそえんだな。

「そういえば、昨日の夜、電気がついたとき誰かがいたような」先輩たちが言つ。

「下見の人間かもしだれないが、浮浪者かもしだれない。もし浮浪者なら捕まえて追い出してやろ」

小島がささやいた。

「でも幽霊話が出たきつかけの話を知つていますか？」

四季さんたちは聞きたがつた。

「いやぼくらは知らないんだ。なんでも閉院が決定した時に、退院どこから引き取り手もない身よりのおばあさんが手術室で自殺したとか？」

それはウソだ。ぼくは大声で笑い出しそうになつた。言い忘れたが実はぼくのパパはここ的手術室で働いていた。看護師として手術室の器具を消毒したり準備したりしていたのさ。

ぼくは入つたことこそないが一度だけ手術室の手前の部屋の窓からぞかせてもらったことがある。そこで自殺なんかできつこないし、もしそういうことがあればパパは教えてくれるだろうぞ。ぼくはその話は教えないことにして提案した。

「じゃあ、その手術室へ行つてみましようか」

「辰夫くんだったね。場所がわかるのか」

「はい、わかります。3階です。何度も来ているしよく知つています」

ぼくは得意になつて先輩たちを案内した。先輩たちは珍しそうにきょろきょろとあたりを見回している。スケボー達も見慣れた病院が変わり果てている様子に興味深そうだった。

ただ健二だけが皮肉な調子で

「それじゃお前のパパは失業したんだ」

といった。四季さんが健二の頭を「じつん」と叩いた。

「なんてこというんだ。バ力健一。あやまれ」

ぼくは寛大になって言った。

「いいんだ。パパはもっといい病院にいるよ。ちょっと遠くの病院になつたけど給料も上がつたし」

四季さんは健二の頭をまだじつじつと叩いていた。健一はしうん、となつた。ぼくは心の中でみていいな、と思っていたから別にあやまつてもらわなくとも平氣だつた。そしてみんなを手術室の中に案内した。

この病院は1階と2階が外来で3階が手術室トリカバリールームと検査室だ。4階から6階までは病室になる。エレベーターは当然ながら動かない。3階まで階段を使う。スニーカーを履いていたのでそんなに足音はしないがきゅつきゅという「ゴムのこする音」がいやだった。

すでに誰かが探検をしたのだろう、廊下や階段のすみっこには砂がたまっていた。どういうわけがみずたまりもある。明りは懐中電灯の丸いわづかのみ。それが何重にもぼくたちを取り巻いている。周囲の闇があしよせている感じだった。怖くはなかつたがいやに心臓がどきどきしているのがしゃくだった。

2階の踊り場まであがつたとき、下からカーーン！という金属音がいきなりした。みな、飛び上がった。音を出したのは小島だった。「ごめん、スケボー板をかべにぶつけた」

暗くて足元がよろけたそうだ。でもぼくは正直言つて心臓がとまつたかと思うほどびっくりした。健一はどうしているかとみれば、やもりみみたいにかべにはりついて息をはずませていた。四季さんが明るい声で、ははは、と笑い出した。

そこから3階の手術室まではすぐだった。部屋自体には窓はないが廊下からの窓から月明かりが少し入つてかるうじて見えるぐらい。そういうえば手術室は直射日光が入るとだめなんだ、とパパがいついたのを思い出す。薬の管理にも影響するからというはなしをする。みんながなるほど、という顔でうなづいた。しかし奥にいくと懐中電灯1個だけだと暗すぎた。それで手術室はすぐに出て長い廊下を歩く。すると小さなホールに出た。

病院が病院であったころはこのホールには薬をつんだワゴンやベッドがあった。白衣を着た人たちが何人も行き来していた活気があ

つた。でも今こいつしてみればうそみたいだ。もう何もかもなくて空っぽだった。赤字でつぶされたのは本当だったのだなあと感じる。そしてやはり不気味だった。

ぼくのとなりに小島がきた。小島はぼくのひじをちょっとつついてウインクした。どういう意味かはわからなかつたが、これからにかするのだ、といふことはわかつた。

小島はぼくにおもむろに質問した。

「なあ、おれちょっとおしつこしたくなつた、トイレはどうだつけて、ぼくもおもむろに答えた。

「確かつきあたりを右だつたよ」

「暗いが大丈夫かな」

「トイレには窓があるから見えるぞ」

小島は隣にいた笹見をさそつて、つきあたりのトイレに行つた。スケボーボードは持つたままで。ぼくたちはこのまま待つことにした。だけどしばりくたつても一人ともトイレから出でこない。

四季さんが心配そうに言つた。

「ちょっと、遅いかな？」

ぼくはちょっとにやにやしてきた。武石も口元がゆるんでいる。ぼくは言った。小さなささやき声で。

「そういえばトイレで誰か首をくくつた人がいたかな？」

健一の肩がぴくっと動く。ぼくは健一の顔をまともに見てやつた。

「手術が失敗して、気が狂つた男の人だ」

そのときタイミング良く

「ぎやあああああ！」

といつすごに叫び声がした。

沈黙。

そして再び、

四季さんたちが懐中電灯を前に、トイレにすすんだ。

「おおい！一人とせん丈夫かででおいで！」

ぼくたちも走った。小島と篠見がすごい勢いでトイレから飛び出した。大事にかかえたスケボー板がかべにあたる「」とに、ガランガラン、ガツ！という音をたてる。

迫真の演技だ。四季さんがふたりをかかえた。

「どうした？何を見た？」

他の大学生も息をはずませていた。

小島は泣いていた。

そのまま走つていってもとの廊下を走り階段を下りて行つた。 笹見は放心したようにへなへなとしゃがむ。 突然、一番後ろにいた健二が叫びだした。

「誰かが、今！おれの髪と肩をつかんだ！」

四季さんは傭一の周りを丹念に光  
とこなすことのよろはしいいたした。  
をかざしてみていたが首を振つた。

健一はわんわん泣きだした。みんなは心底驚いたよつだ。

「アーティスト」

といつた。

ぼくはちょっと混乱した。みんなの後ろのほうで階段を降りながら、笛見に何を見たんだ、とささやいた。笛見の返事はない。かわりにぺろつと舌を出した。武石も階段を降りながらサインをした。  
演技だったのだ！ぼくは感心した。健一はまだひくひくと泣いている。先頭の四季さんの上着をぎゅっとつかんだまま泣いていた。  
うしろからみると足元がもつれて今にもつまづきそうだ。あの状態でよくも階段をおひれるもんだな、とちょっと感心した。

あいつの髪と肩をひっぱったのは武石だったのだ。どうやってやつたのかはわからないが見事な連携プレーだ。1階の窓まではすぐについた。四季さんからはじめて次々に最初の窓から脱出した。にいきついて、四季さんから安全な駐車場に戻る。

そこまできたら、四季さんたちはほうとため息をついた。他の大学生も疲れたようになばこをとりだして吸い始めた。

健一はまだしゃくりあげていた。あいつがこんなに怖がりだなんて思わなかつたな。ぼくも笹見と武石で怖がっているようなふりをしているけど健一の泣き顔を見て楽しさを味わっていた。

が、小島の姿が見えない。先に帰つたのだろう。四季さんは笹見に何をみたのか聞いた。笹見はトイレの中で変な物音と泣き声を聞いた、とだけ答えた。健一が身体をぶるつと震わせる見事なものだ！

ぼくたちも帰ろうとした。駐車場から例の破れ穴から帰ろうとしたると病院の電気が一瞬だけついた。みな動きを止めて、凍りついた。ぼくも見た。電気がついたのは1階だけだった。そしてぱっと消えた。

全員が見た。

1階の窓から、大勢の人々が窓越しにこちらを見ていた。すぐに消えたけど、確かに見た。

誰かがうつと小さなうめき声をあげた。

いや、そんなことがありえるはずがない。幻覚だろう。でも気持ちが悪い。今までそんなことなかつたのに。

気のせい、気のせい。

四季さんは黙つてもう一度懐中電灯を病院にあてた。もちろん見えるわけがない。何もないし、誰もいない。ぼくは思わず言った。

「小島のヤツ、先に帰れたのだろうか。大丈夫かな」

四季さんは振り返つてじつとぼくの顔を見た。ぼくは急に小島が心配になつたのだ。でも誰ももう一度病院に戻つて様子を見ようとはいわなかつた。健一の泣き声がふたたび大きくなつた。案外気の

弱いヤツだつたんだな。

院内の人影の話はもうだれもせずそのままぼくたちも帰つた。  
それにも後味の悪い肝試しだつたのである。

次の日が昇級審査だった。

前の日も遅かつたし日曜日だったが早く起きた。昨日の肝試しの後はなかなか寝付けず起きることができるか心配したが、顔を洗つたらすっきり、しゃんとできた。

病院の中に一緒に入った人たちとは今日の審査でも会うはずだ。審査の後、有段者は全員、練習試合にでることになっている。

トイレでのうめき声と健一へのいたずらはもううるさい、ぼくのスケボー仲間がやつたことに間違いはない。しかし窓の人影は何だったのか?どう考えても理屈にあわないのを考えるのをやめた。でも思考があの人影にいきついてしまう。人影は一人ではなく大勢だった。気持ちが悪いのはそこからきている。やめよう、考えるのはやめにしよう。

昇級審査に行く前に小島の家によつた。やつは朝起きのパジャマのままで玄関まで出てきた。

「やあ、おはよ。きのうはおもしろかったな」

「やつぱり、あれは演技か」

「ははははは」

「武石のやつもうまくやつただろう?」

「うん、健一はずつと泣いていたなあ」

「あはははは!」

ぼくたちは際限なくげらげら笑つた。でもぼくは最後に見た人影のことを言つと全然信じてくれなかつた。

「まだだよ、ぼくまで騙しちゃあ

とかいづ。ちよつと怖くなつたよつだ。ぼくも話すのをやめた。

それからチャリンゴをこいで道場まで走つて行った。

審査の時間、ぎりぎりだつたが着替えに間に合つて、最初から見学できた。道場のすみっこにすわつて見ていると等々力先生からは「次回は黄帯をねらつてうけろよ」と励ましてくれた。

そう、次回の審査には絶対合格するさ。だから今から毎晩自主稽古しているのさー！

一方、健一のやつはよく眠れなかつたのかぼうつかとした顔をしていたなあ。ははは。

四季さんがぼくの横にすわつた。ぼくは空手のあいさつで「押忍」というと大きく笑つてぼくの頭をなでてくれた。

「あの子、何といったかな、先に帰つた子は大丈夫だつたか」「小島くんです。押忍。今朝家に行つたら、ちゃんといましたよー」「きのうの肝試しはおもしろかつたな」

「押忍」

「もしかして、あれ、お前たちの芝居か？」

「・・・・・」

「昨日は動転したが、冷静になつてみるとおかしいぞ」

ぼくは言葉につまつた。けれど四季さんの目が笑つていたのでほつとした。

「さ、怒らないから言つてごらん」

ぼくは観念した。四季さんは最初からわかつていたのかもしね。この人だけが懐中電灯をもつていて、終始一番先頭を歩いていた。スケボー仲間の目配せなどがガラス越しに目の端に入つていたのもしれない。

「押忍・・・

「健一がいたからか？」

「押忍」

四季さんはまた笑つた。そして「しようがないなあ」というふうにぼくの頭を軽く小突いた。ぼくは笑つてもらつて良かつたと思う。

だつて健一はともかく四季さんたちにはまったく恨みはない。だましたということで、ちょっと後ろめたい気もあつたのだ。

休憩をはさんで黒帯同士の練習試合になつた。年齢と段位の低い順番だったので健一は最初だった。けど、初心者のぼくから見ても、へろへろだった。試合開始後10秒足らずで自分より背の低い相手に蹴りを入れられて一本取られた。しかも上段回し蹴りで、だ。あいつは無様にぶつ倒れた。はつはーーざまみろ、だ。昨日のショックをひきずつていたのだろうね。ぼくの気分は最高に良かつた。ざまあみろ、ぼくをちびだの何だとバカにするからこういう羽目になるのさ。今度の昇段試験も落ちて、ずっと落ちまくつて白帯に戻れ！

かわりにぼくが黒帯をとるわ。

健一は鼻血がたくさん出て介抱してもらつっていた。空手着の前半分は血だらけだ。ぼくは大満足して家に帰つた。もちろん、帰り道に小島に報告することも忘れなかつた。

病院に一瞬着いたあの明かりと人影だが確かに気持ち悪かつたがすぐに忘れた。あれから道場でも、病院にはやつぱり幽霊がいたらしきといううわさも出た。多分大学生たちが言つたのだろう。が、四季さんは何も言わなかつたし、健一もおとなしくなつた。

健一はぼくに泣き顔と一本とられて無様に負けたところを見られたのがよほどいやしかつたらしい。ある日には、手足と頭に防具をつけて試合にみたいにすることだ。乱取りともいう。これも大事な稽古なのだが、帯の色が違う者同士のスパーリングは禁じられている。力量がちがうと怪我の原因になるからだ。

「おい、ぼくはまだ白帯だぞ？」

その日、等々力先生は休みだった。先生の休みを見計らつて誘うところが、嫌なヤツだ。まわりも年下の小学生ばかりだった。いさめるのは誰もいないし、ぼくも断りたくなかつた。

やられるのはわかつていたが、逃げたくなかつたのだ。

結果はもちろんぼくの負けだつた。なおりかけた左腕もろつ骨も蹴られてぼこぼこになつた。健一は蹴つたり殴つたりしながら「思いましたか、このチビー降参しろ！」

と叫んだ。ぼくは絶対に降参しなかつた。健一はたおれたままのぼくを蹴つていいく。気が遠くなりかけたとき、誰かが誰かを呼んだようだ。

「やめ！」

という大声が道場中に響き渡つた。

四季さんだつた。

健一の方をまっすぐ行くと、いきなり健一を蹴つた。

「バカ野郎！」

健一はこの一発で、ずでーんと床に転がつた。お腹をかかえて、小さい声で「押忍」と言つた。ぼくも床にのびていたから、健一とともに田があつてしまつた。健一の田があびえていた。

健一はぼくが怖いのだ、とふと思つた。

それきり意識がない。ぼくは失神したのだ。

気がつくと家だった。起き上ると身体中が痛い。でも大丈夫だろつ。布団から抜け出て腹這いになつてジュークをのんでいたら、ママに見つかつた。ママが金切り声で寝てなさい!と怒つた。痛いけど別に平氣だ・。

ママは言つ。

「四季さん、といつう人が車で運んでくださつたのよ。もう空手なんか危ないからしてはだめよ。辰夫、もうやめような」空手をやめるなんてとんでもない。ぼくは返事する代わりにママのスカートを思い切りめくつた。ひるんでいる間に弟の巳郎が読んでいた本を取り上げ、窓の外に放り込んでやつた。ま、これはついでだけど。

で、外に出ようとしたら、等々力先生が玄関にいた。ぼくは驚いて棒立ちになつた。ママもぼくを叱つとおつかけていたが先生を見て黙つた。先生はあきれたようにぼくを見た。

「辰夫君はやんちゃだなあ

先生のうしろからちょこんと健一が出てきた。恥ずかしそうへんこりと頭を下げた。あやまりにきたのだ。駅前のケーキ屋さんの包みをもつていやがる。けつ。でもケーキは大好きだから食べるだろうな。

等々力先生は四季さんの連絡でぼくらのケンカを知つたようだ。用事が終わつたらすぐ健一を連れて見舞いにきてくれたのだ。先生と怖い顔をしたママの前でぼくたちは握手をした。

「健一は決まりをやぶつたから、1ヶ月間の稽古禁止を言い渡した」等々力先生が言つと健一はうなだれていた。やりすぎた、と思ったのだろう。ひょっとかわいそつになつて「もういいよ」と言つてやつた。

「いつか黒帯を取つて、お前を倒してやるから」と言つた。ママはあきれていたが本氣だつた。

思えばぼくが空手をはじめたのも、こいつのせいだ。こいつは座つても背が高いのがわかるが今はぼくの家で小さくなっている。等々力先生がいきなり笑った。

「辰夫君は最後まで降参しなかった、とか。先生は大いに期待しているよ。な、健一もそう思うだろう。白帯はすぐに降参して当たり前なのに、最後まで抵抗したのだから」

健一は蚊の泣くような小さい声で

「そう思います」

といった。ぼくの勝ちだ。

スパークリングでは負けに負けたけれど、勝った！と思つた。先生は言つた。

「辰夫君にもう一度、きちんとあやまりなさい」

「すみませんでした・・・」

健一とぼくはしばらく黙りこくつたままだった。が、何となくおかしくなってきた。健一はぼくを見てにやつと笑つた。ぼくも思わず笑い返した。それから一人で声をあわせて笑つた。

ははははははは！

ケンカはそれまでの話になつた。健一はぼくのことを、ちび、とか言わなくなつた。そうしてみると案外いいヤツだつたこともわかつた。

ぼくはあいかわらず夕方から夜まで例の病院で自主稽古を続けていた。そのことを知つた健一は、お前は努力家だ、とほめた。

「おれも家が近かつたら一緒にやるが、塾の夏期講習も行つていて、無理だな」

残念そうだつた。小さいころから空手を稽古しているだけあってぼくにいくつも有益なアドバイスをくれた。ぼくたちはだんだん仲が良くなつた。そのことを等々力先生も四季さんも喜んでくれた。

夏休みのクライマックス、盆踊りが近くなつた。子供会の肝試しは、結局あの病院ではしないそつだ。前の持ち主がそんなことをすると、変なうわさが出て余計に買い手がつかなくなると怒つたそうだ。

それもそつだよな。パパに聞いてみると赤字がすぐくて誰も後を継ぎうといつう人がいないそつだ。

病院の持ち主はおもしろくなからうが、駐車場は絶好の子供の遊び場だ。広々としているので爆竹を鳴らすヤツが出てきたりしますにぎやかになつてきた。

病院の中を探検したヤツの話も聞いた。でも何もなかつたらしい。前にぼくたちが入つたときの作り話がどこでどうなつたか、独り歩きをしている。幽霊話をしたり顔で伝えて本当らしげ、と耳打ちするヤツもいた。そんな話を聞くたびにスケボー仲間に教えてやつてゲラゲラ笑つた。

ついでながらぼくもスケボーは上達した。スケボー仲間にも空手の型を教えてやつたりして、ぼくたちはいつもつるんでいた。で、ついつい帰りが遅くなつてしまつ。ママは毎晩怒るけど、楽しい仲間だから仕方ないよと思つてほしい。

ママにはお気に入りの巴郎がいるではないか？あいつはぼくから見てもいい子だ。ぜんそく持ちのせいもあって、ママが外に出したがらない。例の病院では小児科一番のお得意さんだつた。いい子だよ、一応・・・。というのはその分、ぼくが悪い子になるわけ。

巴郎もママの言いつけをきちんと守る。脱いだものはきちんとたたむ。くつをそろえる。ハンカチをもつてポケットに入れる。戸をきちんとしめて開け放し、散らかしつぱなしさしない。お勉強も大好きで成績も良い。なにもかもいい子で悪いところはとくにない。ぼくはママのいつけはたいてい窮屈なので聞かない。すぐ忘れてしまつ。

巳郎はぼくの悪いところをママが口にすることがある。そのたびに殴つてやるのだが・・・。

弟のくせにぼくの背丈を追い越したことも眞に入らない。ま、これはどうしようもないが、兄としてこの根性はたきなおさないといかん。やうだらう?

で、また駐車場の話に戻る。いつものように仲間と遊んでいたら健一がめずらしくやつてきた驚いた。今日は塾がお盆休みだから遊びに来た、という。こいつとは仲直りしたから、ぼくたちは歓迎した。ひとしきり空手の稽古をしてからスケボーもした。

気がつくともう夜になっている。どうして遊んでいのとこんなに時間が早くなつたのだろうか。

健一は家が遠いからもう帰るといつ。帰り際に健一は病院の方を振り返つてつぶやいた。

「おれ、もう1回あの病院に入ろうつと思つている」  
ぼくとスケボー仲間は顔を見合させた。実は健一を騙して怖がらせたことはまだ話していなかつた。いつか話した方がいいとは思つけれど。

健一は思いつめたように言つ。  
「あの時怖かつた自分がどうしても許せない。もう1回入つて恐怖心を克服したい」

立派なもんだ。

ぼくは最後に明かりがついたときのぞつとした感覚を思い出した。あれから駐車場にいても変なことは起こらない。幽霊話もうそだし。だけど、あの奇妙な感覚だけは不思議だつた。

健一は「明日も塾は休みだし、決行するよ」といつた。

見れば今も懐中電灯を持っている。もしかして今日にでも、本当は行くつもりだったのかもしない。しかしほくたちもいたし、行き

そびれたのかもしない。

健一が帰った後、ぼくとスケボー仲間はどうするか相談した。本当のことを言つてもいいのだけど、ほんの少しの好奇心も出てきたのだ。あいつとはもう仲良くなつていてるから怒りはしないだらう。きっと一緒に行くべきだらうな、責任上。

すると小島は変なことを言い出した。

「あの時先に帰つたけど、ちょっと、あつたんだ‥‥

「何が?」

小島はためらつてゐる。今まで話せなかつたのか?

「話してみろよ」

ぼくは促した。小島は迷つてゐたが思い切つたように言つた。

「あの時、確かに先に帰つた。みんなより先に階段を下りる。入ってきたガラスの方に向かうだらう?」

「うん、うん」

「誰かが一緒に走つてきて階段を下りたんだ」

「えー?」

「氣のせいかと何度も思つたけど、それが1人でなかつたんだ」

「ふうん? 後ろは見たのか」

「怖くて振り返れなかつた。きっと氣のせいだつたんだろう。病院の外に出たのはぼく一人だつたし」「足音だけ、か」

小島は首を振つた。

「足音じゃないよ。はあは、とこゝう息遣いだつた

結局。

翌日、肝試しに参加するのは、ぼくと健一だけになつた。あとの 笹見や武石は小島の話を聞いてぶるつたのだろう。外はまだ日がか たむいておらず明るい。明るいうちにしてしまおうといつのだ。 スケボー仲間は外で見張つておくといつ。

そうしてもうつもりだ。万ーのために。

健一は自分の携帯電話を持ってきていた。用意周到なヤツだ。さあ、行こうとすると意外なことに弟の巳郎が外を通りかかった。ぼくは、おおい、と呼びかけた。

「じつちへ来てみなよ。今からおもしろいことをするから!」

巳郎はしぶしぶという感じだったがぼくたちの近くまできた。今から病院の中へ肝試しに行くからお前もくるか?と聞いた。怖がらせるつもりだった。巳郎はきっとこういうだろう。

お兄ちゃん、いい加減いたずらばかりだめだよ、

病院の中に入っちゃいけないよ、

ママにいっつけるよ、

が、巳郎は、目を輝かせて肝試しに行く、という。嬉々として病院を見上げている。小島も巳郎の喘息を良く知っていたから

「怖くないのか?喘息が出たらどうするんだ」と心配した。

巳郎は行くといつてきかない。意外に勇気があるのだな、ぼくは弟をちょっと見なおした。

結局、ぼくと健一と巳郎の3人が行くことになった。意外な組み合せになつたがあとから思えば、これも運命だつたかもしれない。ぼくたちは例の裏口の窓のところまでスケボー仲間に見送られて、肝試しに行くことになつた。

「巳郎、ぼくは個々の中に入るのは2回目だ。怖くなつたらお前はぼくらに構わず逃げていいから」

「ううん、ぼく、ぜんぜん怖くないよ。だって小さいときから喘息のせいで何回もここに入院した。だからとても懐かしいよ」

実際、巳郎ときたらひどいぜんそく持ちだ。入院していく、学校へ行けなかつた時期もある。懐かしく思う気持ちは本当だらう。ぼくと健一は窓を軽々と越えて院内に入った。巳郎はぼくより背が高いくせに、2人がかりでささえてやらないと窓枠にも登れない。まったく運動神経ゼロじゃないか。手間のかかるヤツ。

まだ外は明るいから前回と違つて病院の廊下も楽々と歩ける。待合用のいすとかが全部取り払われているのでやけに広々としてみえる。

巳郎は本当にうれしそうに先にたつて歩く。

「ほら、兄ちゃん、ここはぼくが通つていた小児科だよ！」

部屋を示すプレートも全部はずされていて、どこが何の部屋だつたかわからなくなつているが、巳郎にはわかるようだ。

肝試しの雰囲気はまったくなかつた。巳郎はさつさと診察室に入る。診察室も机もベッドもなく、がらんとしていた。窓から荒れ果てた小さな庭園がみえた。ここは駐車場側と反対方向の景色を見ることになる。もっとも4・5階からだと国道も見えるし眺めもいいだろうが。

健一はまだまつて部屋を見回していた。ぼくもだ。巳郎だけが喜んでいた。

健一が言った。

「俺、3階の手術室まで行つてみるよ」  
で、3人で行くことにした。途中小島が変な息遣いを聞いた、という階段を使ったが別にどうこうこともない。手術室の中は暗いが

怖くもなかつた。多分外はまだ明るい、という気分的な余裕もあるのだろう。健一もぼくも拍子抜けした。やはり誰かが前に入つたのか、絵具やペンキで白い壁一面に落書きしてあつた。食べ物のかすも散乱している。健一が「こみをけちらかして言ひ。

「あの時は真つ暗だつたからわからなかつたけれど、案外人が隠れていたのかもしないな」

ぼくもうなづいた。ぼくは小島が体験したあの話を教えてやつた。巴朗は黙つて聞いていた。健一は何度もうなづいた。

「じゃ、今も誰かが隠れているかもな」

ぼくらは小さく笑つた。

「じゃ、トイレでもすませて、もう、帰るか?」

ぼくは健一を見た。健一はトイレの一件も本当のこと知らない。健一は巴朗に教えてやつてくる。

「俺、ここで髪の毛をひっぱられたんだ。同時に一緒に着ていたスケボーをもつっていた子も変な声を聞いた。それでな・・・」  
ぼくは早くあやまちなきや、と思った。うそをついて芝居をしたことか。でないと健一と一度と仲良くなれないだろう。

「ごめんよ!」

と叫んだ。健一は話の腰を折られて、けげんそうにぼくを見る。  
「ごめん、あのときはぼくたちのいたずらだつたんだ。だつて・・・」  
いつも君がぼくのことをバカにするから、こらしめてやろうか、と思つたんだ

健一はびっくりしたようだ。

「じゃあ、トイレの話も?」

「・・・そうだよ」

健一はじつとぼくを見ていた。そして「はあ、」とため息をついた。

「俺がそんなに憎かつたんだ?」

「うん、あのときはね、やつぱりぼくへちびつて言われるのが嫌なんだ」

「……よ、俺にも悪いことがあるし。だから、なかつたことじよつ」

健一はあつさつと許してくれた。心にひつかかっていた思いがなくなつてすつきりした。

「ちょっとおかしい、と思つていたんだ。そもそもこの世に幽靈なんかいない。だからここには何もないんだ」

ぼくたち3人は帰らうとした。手術室に通じる自動ドアを手で開ける。ホールを通つて、階段を下りて廊下を曲がればすぐにスケボー仲間の待つ窓に到着だ。あつけない肝試しだった。

と、いきなり巳朗がポケットから吸入薬を取り出して口を開けた。しゅっしゅっ、と液を出す。喘息の発作予防の薬だ。

「なんだ、お前。ぜえぜえの発作が出そうなのか

「ここにはほこりが多いから・・・

「やっぱり軟弱だなあ、お前は！みんなと同じこともできねえんだから」

巳朗は黙つてハンカチを出して口元をぬぐつ。

「女みたいにハンカチ持つんだな。ははは、ぼくはそんなもの持ちあるかねえよ。そういう潔癖さと几帳面なところがきらいだな

「お兄ちゃん・・・

巳朗はせつないようになつむいた。そういうことがママの同情を買うのだろう。だから、弟をいじめではない、と思いつもいじめてしまうのだ。

先に歩いていた健一が振り向いた。晴れ晴れとした表情だ。

「なんにも、なかつたな！」

ぼくは返事の代わりに笑つて拍手した。健一はあれ、といつぶつに巳郎の顔を見た。

「どうした？ 真っ青だよ？」

「なあに、喘息の発作がおきそつなんだ。吸入しているから楽にな

つただろう？ なあ？

巳朗はうなづいた。

「さつき、はしゃぎすぎたんだ。だから、発作がでたんだ」

「まあ帰らうか。こんな軟弱ものの弟なんかこっちで入院でもしていればいいさ」

「お兄ちゃん、待つて！」

1階の廊下についた。角を曲がれば出口の窓だ。少し暗くなつたものの、まだ日はある。廊下にぼくたちのかげが長く伸びた。スケボー仲間はちゃんと待つてくれた。その時初めてぼくは巳朗がないのに気付いた。階段のところまでは確かにいたはずだ。踊り場までは、後ろから足音もしていた。

え？ 踊り場まで？

ぼくは階段のところまで戻つて呼びかけた。

「巳郎？ どこだ。早くも戻つてこい！」

何度も呼びかけても返事がなかつた。ぼくがあんなことをいつたのでふてくされてどこかへ隠れたのか？ ぼくと健一はもう一度3階まで上がつた。

しかし、いない。

1階に再び下りて最初に行つた診察室へも行く。  
いない。

ホールや待合室にも行く。  
いない！

健一も心配そうな顔になつてきた。

「もしかして、先に知らない間に帰ったのでは？」

健一の携帯電話を借りて家に電話をしてみた。ママが出てまだ帰つていなかった。「辰夫、何かあったの？」「ママの心配そうな声が聞こえた。

「ううん、さつき外を歩いているのを見かけたから、なんでもないよ」

とかいつて電話を切る。考えてみればぼくたちは3階の手術室に通じるホールへ出てそのまま階段を下りたはず。その時点では巳朗は確かにいた。階段の踊り場でも絶対にいたはず。先に帰れるはずはない。

健一も同感だった。

「お前、巳朗くんにひどい」といつただろう。弟なのに。いじめられた仕返しをしているのでは？俺がお前をいじめた仕返しを、前の肝試しでされたよ！」

返す言葉がなかつた。

多分そعدだらう、と思つ。ぼくはホールに出て叫んだ。病院中に聞こえるような大声で！

「おおい、巳朗！兄ちゃんが悪かったから、出でこよーお前が欲しがつていたあのゲームもやるからー！」  
しーんとしている。夕日はどんどんおちて暗くなつてきた。健一は懐中電灯をつけた。

喘息のひどい発作がおきると声も出なくなる時がある。巳朗はそうなのかもしれない。健一が提案した。  
「どうする？誰か大人を呼ぶかい？」

とりあえずスケボー仲間のいる窓のところまで再び戻る。巳朗が

戻るとき、ここまでくるにきまつていいからだ。

「おい、巳朗は出てきたか？」

小島たちは首をふった。

「ううん」

ぼくたちの顔にあせりがでてきた。

「やっぱり警察の人を呼ばうか？」

巳朗がもし帰つてこなかつたら…。それを思つと怖くなつた。  
パパもママもどれだけ悲しむだろうか。ぼくだつて、いじめてばか  
りしたけれど、いい弟だったのに！ぼくは叫んだ。

「おおい、兄ちゃんが悪かつたから！出でてくれ！好きなゲーム  
でもなんでもやるから！出でてくれえ！」

叫んでいるうちに涙が出てきた。

「兄ちゃんが悪かつた！いじめて悪かつた！だつてお前はいつもい  
い子だし、弟のくせに背が高いし、腹が立つたんだ！でも、もうい  
じめないから、出でてくれえ！」

最後はかすれ声になつた。健一がぼくの肩を抱いて、

「警察に電話するよ、いいね？」

と聞いた。

外はすっかり暗くなつた。健一は携帯電話をあけて電話しようとした。

まさにその時、巳朗のかほそい声が聞こえた。

「お兄ちゃん…」

階段の踊り場の方からだ。ぼくも健一も急いで階段に戻つた。

「上方だつたな！」

「確かに聞こえたよな？」

スケボー仲間も中に入つてきた。もつ真つ暗だ。

懐中電灯と携帯電話の明かりを頼りに3階にあがる。ぼくは最初  
の肝試しを思い出した。あの時とメンバーは違う。大人はいないの

だ。しかしどうしても、巳朗を連れて帰らないといけない。巳朗は発作をおこして声が出せないのかもしれない。でも発作を起こしたのだからひゅーひゅーとかすれ声が聞こえてくるのだけど。。。。ぼくはふいにこの事実を思い出してぞつとした。最悪の場合、呼吸ができなくなつて死んでしまうかもしれないからだ。

「おおい、巳朗！どこにいるんだ？出でおいで！早く一緒に帰ろつよ！」

小島や笹見も大声で呼びかけてくれた。

「巳朗ちやーん、出でおいでよー」

健一もだ。

「巳朗くーん！巳朗くーん！」

でも巳朗の声も、咳の音も何も聞こえない。3階の廊下も手術室もトイレの中も誰もいなかつた。

ぼくはどうとう泣きだした。武石が肩を抱いてくれた。

「泣くなよ、もっとうちやんとさがそうや」

「やうだ。きつとどこかにいるさ。だつて声が聞こえたんだから」

「巳朗ちやんは発作で声がでないか、誰かに引き留められているのかも？」

そういうのは小島だ。小島は少し震えていた。

「おこ小島、変なことをいうなよ。こんなときにはー！」

小島は懐中電灯に照らされた壁の落書きを見てくる。

「だつて、この落書きやうみの山みてみろよ」

いきなり健一が「押忍！」といつて空手の型をとつた。そして叫んだ。

「おい！誰が巳朗くんをひきとめているのか。放してやれよー俺たちは空手をやつているから怒らせたら後が怖いぞ！」

それから鋭い気合いでポーズを次々に変えた。ぼくも健一の気合いをきいて少し元氣を取り戻す。

相談の結果、小島と笹見が先に出て、大人を呼んでくることに決めた。ぼくと健一と武石がここでもう少し探すことにする。3階だ

けでなく2階も1階も探した。

でも、いない。

4階から上は大人たちが来てから、ということにした。ぼくは巳朗を思つて泣けてしかたがなかつた。ぼくには1人しか弟がない。どうしていじめたのだろう。背丈がぼくを追い越したのが単純にくやしかつたのだ。ママの言いつけをきちんと守るいい子だから、目障りだつたからだ。

ぼくが弟をいじめると、あいつはいつも手を伏せてじっと我慢していた。ぼくならやり返すところを、あいつはただ黙つていたな。激しい運動も禁じられていたから、ぼくの空手の練習着を羨ましそうに見ていたことにあつたけ・・。それまで考えたことのない弟への想いが次々に湧いて出た。涙があふれ出る。ぼくは大声を出して泣いてしまつた。

「ええん、ええん！」

健一と武石がそつと寄り添つてくれた。

「ええん！巳朗！」めんよお、もういじめたりしないから、出てきてくれよう！」

巳朗がこんなに大事な弟だつたなんて、ぼくは知らなかつた。早く巳朗の顔が見たい！探さねばならない。

「やつぱりぼく、4階も見てくる！」

ぼくは階段を駆け上がろうとした。

「落ちつけよ、4階以上は病室だらう。たくさん部屋があるじゃないか、だれか応援がくるまで待つていようよ。1階に戻ろう！」

明かりがないと真つ暗闇だ。今夜は曇つているのか月明かりもない。さつきの声は階段の踊り場から聞こえたはずだ。

健一は一生懸命になぐさめてくれる。「きっと見つかるから」それも身にしました。

思えばぼくは乱暴者で、ぼくこそ意地悪なお兄ちゃんだった。背が高い、低いでささいなことでもぼくがいじめたのだ。ぼくがみんな悪いんだ。

仕方なく1階まで戻つて応援を待つことにする。階段を下りる。健二が先頭で明かりをもち、次が武石、ぼくが一番最後に下りた。真っ暗な後ろを振り返りながら。

ふと、はあはあといつ息遣いが聞こえたよつた気がした。ぼくは立ち止つた。気のせいか？ 健一がぼくに明かりをあてた。

「どうしたんだ？ 急に立ち止つて？」

息遣いはもう聞こえない。ぼくは首を振つた。

1階に下りた。例の出入口の窓近くで健一の携帯電話がいきなり鳴つた。ぼくたちはびっくりして飛び上がつた。

健一が「ママからかな？」と言つた。「もしもし？」健一が受話器をいきなりぼくの方へ向けた。

「辰夫、きみにだよ？」

ぼくに？ とりあえず電話を受け取つた。

「もし、もし？」

ぼそぼそとした声が聞こえた。何を言つているのかわからない。

「もしもし、もしもし？」

武石と健一がぼくの近くに寄つてきて一緒に耳をすませた。といきなりしわがれた声が聞こえた。

「辰夫かい」

「ええっ・・おじいちゃん？」

ぼくは首を振つた。おじいちゃんであるはずがない。受話器からは大勢の人気がひそひそ話をしているような変な雑音がする。第一、ぼくのおじいちゃんは・・・。

「・・・もしもし、もしもし？」

「辰夫、弟を、巳朗と仲良くな。大事にしてやりなさい」

「やつぱり、おじいちゃん！」

がちや、つー、つー、つー、

電話が切れた。

ぼくはいま聞いた声が信じられなかつた。確かに2年前に死んだおじいちゃんの声だつた。おじいちゃんがなぜ健一の携帯電話にか

けてきたのだろうか？ありえないことがおきたのだ。

「ぼくは果然として、電話を見つめた。どうじうことのない普通の携帯電話だ。でも、どうして？どうして……？」

けれど一つわかっていることがある。おじいちゃんはここにこの病院で亡くなっている。そのほかの人も沢山ここに亡くなっている。逆に生まれた人もいる。ぼくや弟がそうだ。

ふいに小島が聞いたはあはあ、という話を思い出した。そうだ、ぼくもあれを聞いたんだ。たった今。健一も武石も凍りついたようにして、ぼくの顔を見ている。健一が不思議そうに聞く。

「お前のおじいさんか？俺の携帯電話の番号をよく知っていたな？」

「・・・お前のおじいちゃん、死んでるよな」

武石だ。声が震えている。そつ、近所なのでぼくのおじいちゃんを知っている。

とたんに健一がぎえつ、と変な声をたてた。  
ぼくはうなづいた。そりやあ、怖かったが神経がマヒしていくかえつて冷静になつた。

「弟を大事にしろ、つてさ」

その時、ホールの方から声がした。

「お兄ちゃん・・・」

巳朗の声だ。ぼく達は走つて行つた。走りながら、叫ぶ。

「巳朗！どこだー！」

「ここだよ」

巳朗が目の前のドアを開けて立つていた。そこは小児科の診察室だ。最初にぼく達が入つて行つた部屋だ。でも、ここだつて何度も探したのに。

巳朗はひょっこり立つていた。発作もおこしていなかつたようだ。けろりとした顔だ。

「巳朗、今まで一体、何をしていたんだ。あんなに呼んでいたのに、

聞こえなかつたのか？」「

「うん・・、寝ていたんだ」

ぼくは安心のあまり、巴朗に抱きついた。巴朗は壁にあたつてよろけた。ぼくは泣いた。巴朗はびっくりしてぼくに抱かれたまま、じつとしていた。

「お兄ちゃん、泣かないで。ぼく、寝ていたんだよ。知らないいうちに、ここにきて寝ていたんだ」

「こんな真っ暗な部屋で一人でねていたのか？」

ぼくはこいつが電気を消して真っ暗になると怖くて眠れないのをしつているので驚いた。机の上の小さな明かりをつけて寝ている。

「怖くなかったのか？ぼく達はこの部屋も探したんだよ、一体どこにいたんだ」

「おじいちゃんの夢を見ていただけだよ、それだけだよ・・

ぼくたちは懐中電灯で部屋をぐるっと見まわした。もちろん、誰もいないさ・・。

武石が上ずつた声で叫んだ。

「さ、早くここを出よ。巴朗ちゃんも見つかったから、早く、出よよ！」

ぼく達は例の窓までノンストップで走り、窓から滑り落ちて出て行つた。駐車場まで、早く！巴朗がまた消えてしまわないよ！手をしつかり握つてやつた。巴朗は時々、後ろを振り返る。

「どうしんたんだ」

巴朗は黙つていた。

やつとの思いで外に出た。駐車場まで来ると大丈夫！空気がすぐおいしかつた。ぼく達は思い切り深呼吸した。健一が明るい声で言つ。

「結局、巴朗くんも出できて、よかつた！」

その時小島や笠見が、ぼくの両親や数人の大人を連れて駐車場に

入ってきた。小島が最初に駆け寄つてきて「大丈夫か?」と聞いた。小島の身体は小刻みで震えていた。ママは巳朗をぎゅっと抱いた。他の大人たちはぼく達ではなく、病院を見ていた。ぼく達も後ろを振り返つた。病院は真っ暗だった。当然だ。なんとなく身体がぶるつと震えた。

よくあんなところに入つて、うろうろしていたもんだと。

小島がささやいた。

「また、見たよ・・・病院の電気がまたついていたんだ。煌々として明るかつた。お前達があの窓から出ると電気が消えた」  
ぼく達はそういうわれても実感がわかなかった。

「なあおい、電気なんかついていなかつたよな?」

小島と 笹見は震えている。パパやママ、数人の大人たちは押し黙つて いる。

「お前ら・・・誰かに見送られていたぞ。それで窓から出ると元通り真つ暗になつたんだ・・・」

「おい、小島また作り話か?」

巳朗がママから離れてこちぢりに來た。

「お兄ちゃん、作り話じゃないよ。ぼく達、みんなに見送られて出てきたじゃないか」

2013 ( 龍年 )

最終話です。あつがとい。

街灯に照らされた健一や武石の顔が真っ青になつた。多分、このぼくもそうだつたと思う。と、いきなりママがやたら明るい声で「さあさあ帰りましょうねー」と言つた。ぼくの顔を睨みながら言ったので、家に帰ればお仕置きが待つてゐるだろうと覚悟した。

パパが言つた。

「誰か浮浪者がすみついているな。危ないぞ」

大人達がうなづいた。

「パパ、あれはおじいちゃんたちだよ」

巳朗が言つたがもちろんおとなは誰も信じなかつた。

「バカなことをいうものではないよ」

「さあ、さあ」

と促されて駐車場に出たとき、また病院が明るくなつた。例の窓から大勢の人の影が映つた。そしてそれらはすぐ消えた。みんな無言になつた。

巳朗だけがあつけらかんと「今、おじいちゃんが手をふつていたよ」と言つた。

結局あれはなんだつたのかわからない。何者かが、病院に侵入したぼく達を懲らしめたのか？脅かそうとしたのか？

理屈にあわない変な後味が残つた。

でもパパもママも他の大人たちもあれを見たのに幻覚だ、と言つ。絶対に認めないので。巳朗はおじいちゃんが見送つてくれた、と信じている。夢の中でおじいちゃんに励まされたそうだ。

「発作はつらいけど、いつも我慢していてえらいね、大人になつたらきっと良くなるからそれまでの辛抱だ」と。

巳朗は説明する。階段のはあはあ、という声は誰かが気分が悪いから治してほしい、助けてほしい、と言っている、と。それも最初に入ってきたときから訴えていたそうだ。ぼく達には聞こえなかつたが、巳朗だけが聞こえていた。

巳朗はけろりとしていった。

「でもぼくは普通の人間だよ？なにもできないからごめんね」と心の中であやみると、「すみませんでした」と消えていったという。

ぼくは巳朗の話を全面的に信じた。

あいつは不思議なヤツだ。ぼくは空手をしていると強くなれると信じていたけど、空手ができないヤツでも強いヤツはいる、とわかつたんだ。

強いヤツ、というのは巳朗のことだ。ぼくはもう弟をいじめたりしなくなつた。あいつは本をよく読んでいて不思議な話を良く知つていた。ぼくをいじめた健一はいじめなくなつた。弟をいじめていたぼくもいじめなくなつた。

あの病院が治してくれたんだ。

2回にわたる肝試しで理屈にあわないことが確かに起きた。ぼくは病院の前を通るたびに病院を見上げて思う。あの一件があつて、駐車場はかたく封鎖されて入れなくなつた。

病院の内部ももう絶対に入れないようにしたらしい。ぼくを含めて子供たちの遊び場が1つ減つたわけだ。そのうち、取り壊しが決まつた。パパが聞いたところによると大きなスーパー・マーケットになるらしい。でも、ぼくはこの病院をいつまでも覚えているだろう。健一やスケボー仲間の小島、武石、笠見もそうだと思う。でももう入ることはない。

やつぱり怖かったからだ。巳朗は全然怖くもない、という。病院に行かなくともその気になれば仏壇やお墓にでも、おじいちゃんを会えるよ、とまた変なことを言つ。以前は殴つていただろうが、ぼくはもう巳朗を殴らない。おじいちゃんはどうかで見ているだろうし、殴ることに興味がなくなつた。

本当に強いのは健一やぼくでもなく、お前だよ、と言つた。だって死んだ人も平氣で話せるからだ。しかも怖くないのだろう?

巳朗はおかしそうに笑うだけだ。

ああ、一つわかつたよ。

世の中、理屈でわりきれないことがあるつてね。

今もぼくと健一は、仲良く道場で空手の稽古をしてくる。スケボー仲間も本格的にやつてみようかな、と言つてきた。

大歓迎さ。

巳朗にも身体にさわらない程度に、家庭で教えてやつたりする。

ぼく達はこの話を四季さんに教えてあげた。四季さんは言つたよ。「肝試しは大成功だつたね。楽しかつたらう、いい夏休みだつたな

あ

、だつてさ。

ぼくもやう思つた。健一と声をあわせて

「押忍!」

と返事したよ!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4878o/>

---

肝試し

2010年11月19日04時25分発行